二〇二二年六月三日

紫陽花の七色深む今朝の雨　うつぎ
郭公や犬に起こされ朝散歩　かえる
水張りしばかりの田んぼ畦に鷺　明日香
電線の揺れに踏ん張る巣立ち鳥　智恵子
十薬が籬をなせる駐車場　そうけい
青嵐竹百幹をさざめかす　凡士
孵化したる針先ほどの目高かな　みきお
夏至の日の海が呑みこむ大入日　凡士

二〇二二年六月二日

小流れに渡す一本蜘蛛の糸　素秀
ティーショット打たんとすれば時鳥　豊実
河鹿笛一番星のともりけり　うつぎ
己が頬叩けどやぶ蚊打ち取れず　なつき
目を瞑る河馬のおでこに蝶とまる　かえる
電線にいそひよどりの声涼し　ちい
青梅や盥の水をはじきけり　むべ

二〇二二年六月一日

如露の雨プランターから雨蛙　むべ
幼な子のしやがむ足もと蟻の列　みきお
払ひても同じところに蜘蛛の網　かえる
淀川を渡る電車に大西日　ぽんこ
錫杖もしばし憩へる造り滝　素秀
短パンの白き美脚がジョギングす　みきえ
さざ波を追ふさざ波や夕代田　ひのと
青時雨犬の背中に水の玉　ちい
大南風松より高き龍馬像　豊実
採掘の岩山左右に青葉照る　きよえ
ご廟所へつづく燈籠青葉闇　凡士
見積書抱へて来たるアロハシャツ　ひのと

二〇二二年五月三一日

諸星を宿し鎮もる夜の代田　ひのと
あめんぼう雨の水輪に紛れけり　満天
あめんぼう青天井の雲居馳す　あひる
空の字で写経終へたり夕涼し　ひのと

二〇二二年五月三〇日

さながらに浄土の風やバルコニー　せいじ
頬に御手添へて緑雨の半跏像　うつぎ
鎖場に吾を待ちくれし登山帽　せいじ
夏濤をいなし土佐より漁船来る　ひのと
不揃ひのトマト山盛り露地に売る　智恵子
竹林に夕涼の風生まれけり　みきお
片蔭をたどりて父を存問す　むべ

二〇二二年五月二九日

蚊遣火や風入れ替はる夕の縁　むべ
鮎の竿瀬に混みあへる解禁日　凡士
水遣りや花虻の邪魔せぬやうに　かえる
斑猫の導く山路寺の鐘　素秀
草刈り機唸り鶏右往左往　うつぎ
そばかすは母譲りなり夏帽子　ひのと
開けたる新聞匂ふ走り梅雨　うつぎ

二〇二二年五月二八日

天狗風欅若葉の大揺れす　明日香
風五月小さきマルシェの賑はひぬ　もとこ
口中にハーブのかほる夏料理　あひる
実梅落つ前垂れ褪せし石仏に　なつき
つばくらめ川面を掠めまた掠め　満天
軽暖や足なだめつつ磴百段　やよい
梅雨の星見上ぐてるてる坊主かな　ひのと
花心へとストロー伸ばす紋白蝶　ぽんこ
口笛をもて老鶯にあいさつす　せいじ